

20220313 沼崎一郎『人類学者、台湾映画を観る：魏徳聖三部作『海角七号』・『セデック・バレ』・『KANO』の考察』をめぐって—若干のコメント・メモ（鈴木規夫）

はじめに—自己紹介 「植民地」との関係において

- ・「青島」という祖父たちの記憶
- ・曾祖父、祖母の「京城」と「帝国日本」の植民地ネットワーク
- ・日本が「植民地化に手を染めていない」とされていた「中東」とイスラームとの出会い

1 テキストからの素朴な問い

- ・なぜ「人類学者」、「この私」……例えば、『三酔人経綸問答』とはならないのか？
- ・なぜ「台湾」なのか？
- ・これはどのような性格のテキストなのか？
- ・「構造」をどう捉えるか？
- ・貫戦的時間軸の設定をめぐる諸問題

2 「人類学」と帝国主義の植民地経営と幻想

- ・地平の分割化、人間集団の弁別化、言語の分節化……
- ・「台湾」における「国家に抗する社会」をどう考えるべきか？
- ・「朝鮮」というレファレンスとは無効なのか？

3 ポストコロニアリズム+カルチュラル・スタディーズ=未成のマルクス主義

- ・帝国諸国における lost of Empires の諸問題と「台湾」

4 同時代性としてのモダニズムの問題は「台湾」のどこへ収斂するのか？

・例えば、Liu Na'ou 劉訥鷗（1900-1940.9）：本名は劉燦波、筆名に洛生、鷗外鷗などがある。台湾の台南の人。日本で育ち、東京の青山学院や慶応大学の文科で学んだという。1925年卒業後、上海の震旦大学に入り、杜衡、施蛰存らとフランス語特別クラスで学ぶ。1928年、第一線書店を創設、閉鎖処分を受けた後、翌年、水沫書店を創設。「マルクス主義文芸叢書」を出版、自らも『芸術社会学』や日本の新感覚派小説を訳す。また同書店から出版した『無軌列車』『新文藝』などの雑誌に、躍動するリズムとモダニズムの手法で都市の享楽を描いた小説「遊戯」「二人の時間の不感症者」などを書き、1930年には『都市風景線』にまとめた。『映画リズム簡論』のような論文も書いている。上海事変以後日本に渡り、1939年には汪精衛政府に身を投じた。同年、上海で同政府による『文匯報』を出版する仕事をしているときに、刺殺される。穆時英とともに新感覚派の代表作家と見なされている。（『中国現代作家大辞典』新世界出版社 1992）

むすびに